



●「FISH WISH」

ANN CARRINGTON

アン・キャリントンの

スパイシーな想像力

ジョージナ・モンタグュー

Georgina Montagu

グズが話し始める

イギリスの若手彫刻家の一人として注目を集めているアン・キャリントンは、ありきたりの素材を用いて類い稀な作品を生み出す素晴らしい才能に恵まれています。キャリントンの作品に接すると、そこにこめられた作家の濃密とした精気や樂觀的なものの見方が自然に見る側に伝わってくるようです。そして思いがけないところに美しさとユーモアのあることに気づかされ、不要と思われたものに新しい生命の宿るのを発見し、普通なら単純にゴミとして片づけられてしまうものを新たな興味をもって見つめるようになるのです。

ロンドンの街。そこに彼女のインスピレーションの源泉があり、素材の出所があります。街角に捨てられたオブジェの豊富さ、そして様々な国籍、人種の混じり合うコスモポリタン都市独特の雰囲気。キャリントンにとっては、これこそが「イギリスをスパイシーに保つ」(彼女の個展のタイトル)要因なのです。

「また工業化されていない社会が、西欧社会から送りこまれてくるガラクタを吸収してゆく心意気を作品の中に活かしたい」とキャリントンは言います。「ありきたりのものが珍重されている世界が海の彼方にはあるのです。インドからメキシコまで地球を駆けめぐれば、生き生きとしてとても魅力的な発想にふんだんに出会います。ミルク瓶の蓋でつくったネットレスがあります。死者を偲ぶメキシコの祭典で使われる骸骨の人形は、テレビのアンテナで作られています。

ました。」

キャリントンの作り出す世界はつねに意外性に満ちています。彼女の手にかかるとオイル・サードインの缶詰はきらきらと燐光を発する魚に変身しますし、車のタイヤは柱をそろそろと這い登るアルマジロになり、スーパー・マーケットのカートは白い洗濯バサミで作られた羽根を拡げて天国の椅子に生まれ変わるのです。

しかし彼女の作品には軽薄で浮ついたところは少しもありません。作品の背景には一貫した思想の流れがありますし、またタイトルにはしばしば楽しい語呂合わせが登場します。オイル・サードインの缶詰を用いた「フィッシュ・ウィッシュ(魚の願い)」がとりあげているテーマは、資源を貪り廃棄物をたれ流すという、現代社会の自然との関わり方でしょう。現在制作中の「海賊放送局(無許可ラジオ送信者)」は、アンテナを素材として海賊の旗印である頭蓋骨と十字の骨組を組み上げ、模造の岩(ロック)に多数埋め込んだものです。それは日本から大量に輸入されるラジオを暗示しているようでもあります。また岩は当然ながらロック・ミュージックに懸けた連想を呼ぶでしょう。現代の社会では、この世にたった一つしか存在しないユニークなオブジェをつくるという特権はアーティストのみに与えられているのです。

「ララゲ」と題された作品は潰した靴を集めて鰐の形につくったララゲで、これは植民地時代の倒錯した俗物根性を揶揄するものでしょう。そこでは社会的な価値観と環境についての思想が試されることになり

ます。

キャリントンの素材(ロンドンの露店、ボロ市、引き潮の時のチームズ河畔と出所は様々ですが)の選び方はもちろん出鱈目ではありません。「モルタデルロ(サラミ)の馬」では、馬肉サラミの一種であるモルタデルロ・ソーセージを使って、ローマ時代の赤御影石の彫刻を模しています。「ガラスの船」と題された作品は、昨年イギリスを襲ったハリケーン一過後にみつかった瓶を素材として、嵐の晩に荒れ狂う海を漂う船の様子を表現したものです。

「羽根の生えた飛行機」では、飛行機が鴉鳥のように見えます。これはハイジャックされた飛行機と猟師に撃たれた雉のイメーヂを重ね合わせたものでしょう。「ホーカー・ハート」と題された飛行機をモティーフにした作品では、もし鳥がそんなに大きければどんなに恐ろしいだろうかと考えさせられます。「アフリカの可愛い動物たち」はロンドンの科学博物館の古くなった展示ケースを使ってつくられたものです。「歌姫」はひき肉を挽く器械を中心として、石炭バサミを脚に見立て、その他にも車輪やナイフを組み合わせています。

とらわれない垂直思考

キャリントンの作品づくりにかける熱意には並々ならぬものがあります。アイデアの源は身の回りのあらゆる場面にありますから、バスのチケットや果物の包み紙でさえ仇や疎かに扱いませんし、またラジオやテレビの放送にも耳を傾け、目を凝らしています。そのようにして集めた材料を

キャリントンには巨大なスクラップ・ブックに片端から貼りつけていきます。このスクラップ・ブックをキャリントンは「聖書」と呼びます。なぜなら、そこでは「虚構が事実であり事実が虚構となり、不条理が完璧に道理にかなっている」からなのです。キャリントンの作品の魅力は、ものに囚わ



●“HAWKER HART”

れないこうした垂直思考から生まれているでしょう。

第三世界の人々は貧しいが故に空き缶をコップに使いもすれば蠟燭立ての材料にもします。またタイヤのゴムから靴を作るという才能の閃きを示すこともありませう。キャリントンにはこれらを素材として

ウィットとアイロニーを駆使したパロディ風の作品があります。このような場合でも、人間の生存には決して不可欠とは言えない彫刻を作るという行為を通じて、彼女は生産過剰という現代社会の現実に対して控え目ながら情け容赦の無い批評を加えることを忘れません。

最近ではゴミなどの廃棄物を利用する作家も少なくありません。しかしキャリントンはこうした背景にあるのは単にわたしたちの社会が惜しげもなく物を捨て、莫大な



●“RA RUG”

無駄を産みつつあるという事実だけでは無いと考えているようです。「アーティストの役割は時とともに変化しますし、芸術を芸術たらしめる条件も不変ではありません。ミケランジェロだつたら鳥の骨や牡蠣の貝殻を使って彫刻をつくらうとはしなかったでしょう。それは時代がまだそこまで進んでいなかったからです。アフリカの彫刻に眼を向け、ブロンズを鍛造することや大理石を削ることだけが彫刻の道ではないことを示したのはピカソやブラックたちでした。」

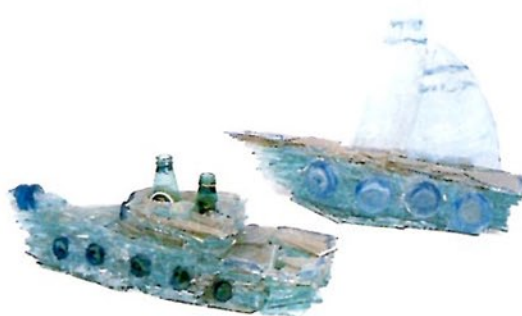
世を退屈から救うものは

キャリントンの彫刻にはどこかユーモラスなところがあります。ユーモアほど人間的なものはない。彼女はそう考えています。一般にはウィットに富んだ作品を真面目にとる人は少ないようです。しかしキャリントンに言わせれば、「この世の中を退屈から救っているのは一風変わった人たち、型にはまらない人たちなんです。イギリスには伝統的にそうした人たちを生み出す素地が

あるのではないかしら。それにイギリスの都市は以前にも増して国際的になってきているでしょう。ロンドンには凡そありとあらゆる国籍の人々が屯する人種の坩堝になりました。そんな環境の中で、わたしの作品は狂気の一つの表現だと考えてもらえばいいんです。わたしはアーティスト、ゴミを漁って暮らす無害な変人です。わたしの役割は、ありきたりと思われている物の中に美を見出すこと、そしてそれをま

とめて作品に仕立てあげ、わたしたちが今こうして暮らしている世界について一言コメントする。人々がそれをきっかけとして、何かを考え始めてくれればそれで充分なのです。」

© ANN CARRINGTON デザイン・キーンツ写真
訳：木下博夫



●“GLASS BOATS”



●スタジオで作品たちに囲まれたアン・キャリントン